命ある全てのもの達へ

但野 尚

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
命ある全てのもの達へ

【Ｎコード】
Ｎ５５５９Ｚ

【作者名】
但野　尚

【あらすじ】
異世界へ「勇者」として召還された大量のアジア人種。「世界を破滅から救うため」という大義名分のもとに行われた召還は本当に正義だったのか？
多分チート無し、コメディ無し、シリアスというよりひたすら暗い話しになりそうな気配。

プロローグ（前書き）

※注意※大規模災害の描写があります。読みたくない方は飛ばしてください。

プロローグ

「そのとき」に関する記憶は酷く曖昧だ。
特に「そのとき」の直前まで自分がどこで何をしていたか、ほとんど思い出すことができない。

「そのとき」、一瞬にして世界は崩壊した。
何の前触れもなく大地が鳴動し、人も建物もカクテルシェーカーの中の氷のように振り散らかされた。
そして……信じられないほど大量の海水が、圧倒的な破壊力を持って全てを押し流す。
息も出来ず、洗濯機の中の古タオルよろしくもみくちゃにされて、上下左右の区別もつかないまま途切れる意識……

次の記憶は揺れる船の上。
ぴしゃぴしゃと頬を叩かれ重いまぶたをあげると、突然、目の前に突き出される異国人の顔。

「……！」

解らない言語で何か叫んでいる異国人の、それでも表情はぱっと明るくなる。
やや遅れて、似たような容貌の異国人がわらわらと集まってきて、顔を拭かれ、温かいものに全身を包まれる。
そっと上半身が持ち上げられ、温かい飲み物が差し付けられて、そ

れに反射的に口をつけると、周りからホッとしたようなどよめきが漏れた。

飲み物の器越しに暗くうねる海が見える。
波間に浮かぶ大量の瓦礫の中には燃えているものもあり、その明るさが照らし出す海面には、夥しい数の人間の肉体がそこかしこに漂っている。

異国人たちは手に手に長い棒を持ち、船の縁から暗い水面を探りながら、大声で叫び続けている。時折、引き上げられる人間もあるが、やがて頭まで大きな布に包まれて、整然と甲板に並べられていく。
さして大きくない船の上は、そろそろそをな包みでいっぱいになりそうだ。

……どうやら、大規模な災害が起きていて、異国人たちはその対応に追われる救助隊であるらしい。
そう思い至ったのは、捜索を断念したのであろう船が陸地へ向けて転進した時だった。

それにしても、どこの国の救助隊だろうか。
聞こえてくる言葉は少なくとも英語ではない。
服装も、救助隊や軍隊というよりはむしろ宗教的な、あまり活動的とは言い難い裾長いものだ。

横でさかんに話し掛けてくる異国人が、ふと思い出したように荷物の中から輪のようなものを取り出して頭にのせてくる。
額にヒヤリと金属が触れたとたんに、それまで全く理解不能だった言語が日本語に変わる。

「ごめんなさい、気がつかなくて。不安だったでしょう？もう大丈夫ですよ」

頷いてみせると、異国人は安心したように笑った。
怪我はないかたずねられて首を横に振ると、与えられていた飲み物をもっと飲むよう勧められた。
気持ちが落ち着くからと言われた事や、その後の引きずり込まれるような眠気を考えると、どうやらあの飲み物には鎮静剤の類が入っていたのだろう。その作用で多少の逆行性健忘が起きていたのかもしれない。

意識が遠のいていく最中、異国人たちの誰かのつぶやきが妙に耳に残った。

「……今回は大量だったな……」

災害の大きさに戸惑う救助隊員のつぶやきとして、その時はあまり気にならなかった一言。

しかし後に思い出した時、ふと内臓を鷲掴みにされたような気分にとらわれる。

あの言葉にはもっと別の解釈があるのかも知れないと。

動揺（前書き）

誤字脱字、用語の間違いなどありましたらご教示ください。

動揺

時系列がはっきりしている記憶は「避難所」から始まる。

遠くから聞こえてきた潮騒が次第にざわめきに変わり、やがて不特定多数の会話だと認識できるようになる頃。

深い海の底からゆらゆら浮かび上がるように、少しずつ、少しずつ意識が鮮明になる。

まぶたの向こうが明るくなり、それが木洩れ日のようにちらついている。

周囲でにわかに人の動きが増えたことが、背に響くかすかな振動から感じとれる。

名前を呼ばれたような気がしてまぶたを開いてみると、目の前には高い高い石造りの天井。

身体にかかる薄い毛布をはねのけておそるおそる起き上がれば、病院の入院患者用ベッドのように飾り気のないシングルサイズのベッドの上だ。

「……ここは、どこだ？……」

見渡せば周りは体育館ばりに広い空間で、同じような病院ベッドが一面にびっしりと……ざっと見て５０床以上はある……並べられ、そのひとつひとつに人間が寝かされていた。

中には起き上がっていたり、ベッドに腰掛けているものもあるが、全ての人間に共通するのは黒眼黒髪であることだ。

恐らくほとんどが日本人……少なくともアジア系黄色人種の集団が、ほぼ全員貫頭衣のような簡素な服を着せられて、ベッドについてい

る。
そしてベッドの間の狭い空間を、純白のローブをまとった白色人種と思しき集団がせわしなく歩き回りながら、ベッド上の人間を覗き込んだり話し掛けたりしている。

野戦病院？
もしくは兵舎？
……まさか……強制収容所？

軽いめまいに片手で顔を覆うと、指先に金属が触れる。
手でなぞり、両手で確かめると、額のまわりに細い輪がはめられていた。

……あ……

ふと蘇る船上の記憶。

そうだった。
自分も保護対象……被災者とか傷病者と呼ばれるべき人間なんだ。
ということは、ここは避難所とか病院、多人数を収容するための大規模保護施設の類だろう。

船上では自分以外に生存者はいないのかと絶望的な気持ちでいたけれど、こうして見るとけっこう助かっていたんだなと胸を撫でおろしていたところに、白いローブの男達が大声で呼ばわりはじめる。

「まもなく召還の儀が始まります！動ける方は手荷物を持って、誘導に従って移動してください」

召還……って何だ？
聞き慣れない言葉に首を傾げながら枕元に置かれた布袋を覗くと、中に衣服や財布、携帯など身に着けていた物が入っている。
周囲の人間がもぞもぞと動き始める中、強張る身体を無理やり伸ばし、ベッドから抜け出して袋を背負った。

ローブの男達の誘導に従って歩くのは、皆、自分と似たような者ばかりだ。
ほとんどが十代後半からせいぜい三十代の男。
皆一様に疲れて、生気のない顔つきをしている。
被災直後ならばそれも仕方がないのだろうが、何というか、それだけが原因とは思えない、不自然な活気の無さが気になった。

動揺（後書き）

２０１１年１２月１９日　投稿

召喚（前書き）

誤字脱字、用語の誤用などありましたらご教示ください。

召喚

ローブの男達に導かれた先は、「避難所」よりさらに広い空間……ドーム球場並みの広さと高い丸天井を備えた、やはり石造りの巨大なホールだった。
丸天井の半分以上は華やかなステンドグラスに覆われ、そこかしこにシャンデリアが輝く、金色の装飾も煌びやかな豪華な空間は、教会とか大聖堂などと呼ばれる施設をやたらと巨大にしたように見える。
中央にひときわ高い祭壇があり、その上には白を基調にしたこれまた豪華な衣装に身を包んだ老人が佇んでいる。
髪も髭も見事な銀色の老人もまた、ローブの男達と同様に明らかな白色人種で、明らかに政治的もしくは宗教的に高位にある人物だと見てとれる。

祭壇を取り囲むように並ぶ簡素な長椅子に誘導されて、次々と黒眼黒髪の人間が座らされていく。
四カ所の入り口から川の流れのように続く人波は、いつまでもだらだら続き、なかなか途切れる気配が無かった。

目測でざっと千人近くにはなるだろうか。比率はおよそ男9に対し女1と圧倒的に男が多い。
経験上、災害時の生存者は女が若干多いものだが、珍しいこともあるものだ。それに子供の泣き声も聞こえず高齢者の姿も無い。
もしや女子供は別の施設に収容されているのだろうか。

予想以上に生存者は多かったのだと喜ぶ反面、入り口付近から長椅子にかけて立ち並ぶローブの男達に違和感を覚える。
「避難所」にいた男達と服装は同じなのに、放たれる雰囲気があか

らさまに剣呑だ。
何が違うのかと目を凝らすと、彼らはすべて長短様々な棒や杖、槍や剣を所持して武装している事に気付いた。
背中が嫌な気配にざわついた。
なぜ、今、この状況で武器が要るのか？
周りの人々も落ち着かない様子だ。
ただ単に右も左もわからずに不安がっているだけの者が大半だが、中には武装兵の存在に気付き、彼らから視線が離せない者もいる。
もし誰かが悲鳴でもあげたら、パニックが起きてもおかしくない……そう思った頃、祭壇上から深みのある声が響きわたる。
「静粛に！」
両手を大きくひろげて、歌うように老人が続ける言葉に、ざわつく空間が水を打ったように静まった。
「世界に選ばれし勇者諸君！はるばる異世界より来たりし我らの救世主達よ！ようこそ、聖王都へ！」
……は？
思考が止まる。
今、彼は何と言った？

勇者？
救世主？
……異世界？

「突然このような異世界に召喚されてさぞかし戸惑っていよう。なれど我らの世界は崩壊の危機にあり、これを救えるのはそなた達、異世界からの勇者をおいて外に無い！」

一旦静まり返っていた空間は、それまで以上の喧騒の渦に叩き込まれた。

召喚（後書き）

２０１１年１２月１９日　投稿

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5559z/

命ある全てのもの達へ

2011年12月19日03時45分発行